

調査報告

全国歯科大学・歯学部における「2013年度版 よき歯科医師になるための20の質問 倫理的検討事例集」の利用状況

山本龍生^{1,2)} 木尾哲朗^{1,3)} 尾崎哲則^{1,4)} 檜 則章^{1,5)}
角 忠輝^{1,6)} 平田創一郎^{1,7)} 和田尚久^{1,8)} 平田幸夫^{1,9)}

抄録 歯学教育において医の倫理やプロフェッショナルリズムの重要性が高まっている。日本歯科医学教育学会倫理・プロフェッショナルリズム教育委員会では、倫理・プロフェッショナルリズム教育の推進に資するために「2013年度版 よき歯科医師になるための20の質問 倫理的検討事例集」(以下、本事例集)を作成し、全国の大学歯学部長・歯科大学長に送付して教育担当者による活用を依頼した。そこで、本事例集の使用実態を把握するとともに、事例集改定のための意見収集を目的として調査を行った。全国の大学歯学部長・歯科大学長宛に郵送による質問紙調査を行い、倫理・プロフェッショナルリズム教育担当者からの回答を依頼した。回収率は100%であった。本事例集は29校中10校(34.5%)が使用しており、使用学年は1~5年にほぼ均等に分布し、科目名は「倫理」や「プロフェッショナルリズム」が含まれるものが多かった。方略は8校が演習、PBLまたはTBLを取り入れ、2校が講義のみであった。使用事例は、低学年では大学生活に関するもの、高学年では臨床に関するものが多く、大学の事情に応じて変更して使用しているところもあった。今後希望する事例として、臨床経験のない初年次教育に利用できるような事例、臨床においては高齢者への配慮、認知症、終末期医療などに関するものがあつた。今後は、本事例集の周知に加えて、更なる事例の追加、評価方法の確立が期待される。

キーワード 倫理、プロフェッショナルリズム、事例集、調査、質問紙

緒 言

医の倫理およびプロフェッショナルリズムが歯学教育モデル・コア・カリキュラム¹⁾や歯科医師国家試験出題基準²⁾に明記され、ますます倫理・プロフェッショナルリズム教育の重要性が高まっている。日本歯科医学教育学会倫理・プロフェッショナルリズム教育委員会(以下、本委員会)では、歯学教育における倫理およびプロフェッショナルリズムに関する教育の体系化をめざして様々な活動を

行ってきた³⁾。

そのなかで、2010年度から2012年度までに行つた成果の一部として、倫理・プロフェッショナルリズム教育担当の教員に活用していただくことを目的に、「2013年度版 よき歯科医師になるための20の質問 倫理的検討事例集」⁴⁾(以下、本事例集)を作成した。そして2013年6月に本事例集を全国の大学の歯学部長または歯科大学長に送付し、倫理・プロフェッショナルリズム教育担当者に活用していただくよう依頼した。そこで本事例集の使用実態を把握するとともに、さらに活用しやすいものに改定するために、現場の教員の意見を収集することを目的として調査を行った。

対象および方法

調査対象を全国29の大学歯学部または歯科大学の倫理教育担当の教員とした。

大学歯学部長または歯科大学学長宛に質問紙(図1)を郵送し、倫理教育担当の教員に回答していただくように依頼し、回答は郵送によって回収した。未回収の調査票の督促は電子メールによって行った。

¹⁾ 日本歯科医学教育学会倫理・プロフェッショナルリズム教育委員会

²⁾ 神奈川歯科大学大学院歯学研究科口腔科学講座社会歯科学分野

³⁾ 九州歯科大学総合診療学分野

⁴⁾ 日本大学歯学部医療人間科学分野

⁵⁾ 大阪歯科大学歯学部人権教育室/倫理学教室

⁶⁾ 長崎大学大学院歯学総合研究科総合歯科臨床教育学分野

⁷⁾ 東京歯科大学社会歯科学講座

⁸⁾ 九州大学病院口腔総合診療科

⁹⁾ 神奈川歯科大学

平成28年1月12日受付

平成28年6月6日受理